

浅山英一先生が見出したストック品種の遺伝子を活用した黒川さん父子の育種の大きな成果

林 角 郎

千葉県館山市にある株式会社クロカワストック（以下、KKクロカワ）は平成23年(2011)に日本フラワービジネス大賞2011を受賞し、その後もさらに実績を重ねており、現在わが国で生産するストック切花のあらかたが同社育成品種で占められる状況となっています。

この同社ストックの主力である2品種群とその他の品種育成に浅山英一先生が着目した‘松戸赤’の遺伝子が大きく関係していることはあまり知られていないと思われるため、今回その内容を説明したいと思います。

2012年 花き品種別流通動向分析調査（ストック切花）

日本花普及センター調査資料より

品種区分	品種数	取扱数量 (千本)	同 比 率 (%)	1品種数量 (千本)	取扱金額 (千円)	同 比 率 (%)	平均単価 (円)
カルテット群	27	7,953	36.5	295	665,804	39.3	83.72
アイアン群	14	7,883	36.2	563	641,196	37.9	81.33
その他前 ^(注1)	14	1,908	8.8	136	105,732	6.2	55.42
その他後 ^(注2)	22	1,690	7.8	87	99,847	5.9	59.06
黒川系以外	116	2,351	10.8	20	180,958	10.7	76.98
全体集計	193	21,786	100	113	1,693,538	100	77.74

注1：「その他前」は上段2群以外の平成14年以前発表の黒川系育成品種

注2：「その他後」は上段2群以外の平成15年以後発表の黒川系育成品種

注3：資料は全国主要市場25社を対象に同センターが行った調査から計算し、数量・金額は千以下の単位を折略、四捨五入。

1. 流通動向調査の結果で示されるストック切花の品種間の動向

表に示されたデータは日本花普及センターが行っている花き品種別流通動向分析調査における平成24年(2012)のストック切花の結果から、筆者がKKクロカワの育成品種を区分し、その他品種と共に集計・解析したものです。これによりまずとまず取扱数量・取扱金額とも同社の主力品種群である「カルテット群」と「アイアン群」で7割以上と圧倒的シェアを占めていることがわかります。その他のKKクロカワの育成品種も多く利用されているため、黒川系以外の品種は116品種もありながら数量・金額とも1割前後という状況となっています。なお「その他前」は初代の黒川浩氏（以下、浩さん）が育成し現在も利用されている品種、「その他後」は主として現社長の黒川幹氏（以下、幹さん）が育成した品種です。これら品種中にも‘松戸赤’の遺伝子が関係する品種もありますが、本

稿では前2群を中心に述べます。

なお同社では育成した品種のすべてを採種して、その種子をこれまでは国内で販売してきましたが、近年はかなり海外へも販売しております。この点も注目すべきことですが、今回は割愛します。

2. 黒川父子のストック育種における活動経過

まず初代の浩さんは昭和25年（1950）春に地元の安房農業高校を卒業後直ちに花産業に着手し、ストックの切花生産を行うと共に、当時安房地域の露地切花生産に多く利用されていたピンクの分枝系ストック‘淡紅’の中から、紅色の個体を選抜固定化する育種活動を始めました。この結果、目的の品種が得られたため昭和31年（1956）に‘黒川早生’と名付けて発表し、その種子をすべてご自身で採種し種苗会社を通じて販売しました。

その後も交配育種を行い、それぞれの時代の消費動向にマッチした品種を数多く育成し、その種子を生産してきました。

その後ご長男の幹さんは昭和59年（1984）に静岡大学農学部を卒業後、昭和60年（1985）から実家のストック育種と採種に従事し、平成9年（1997）頃から父に代わって業務を担当、平成22年（2010）にKKクロカワを設立、社長としてそれまで以上に事業を推進しております。こうして平成23年（2011）までの当初からすべて含めた育成品種の総数は122品種に及び、その後も増加しています。

この中で現在もアイアン群とカルテット群に主力をおくほかにイエロー系や複色など新しい花色の開発にも力を入れ、さらに分枝系や花壇用矮性品種など別な形質の品種シリーズも発表しています。

3. カルテット、アイアン両品種群の形質の特長

カルテット群では当初、茎は1本立ちで生長しますが、一般の場合と違って各葉腋に小さな芽を持っています。しかし下部の芽は伸長せず発蕾期になってから上部の数本の分枝が伸びてそれぞれに花房がつき、下部の花から開花します。分枝間では先端かそれに近い枝から開花しますが、間もなく全部の枝がスプレー型

に咲いて豪華な花房となります。そして花茎は主茎も分枝も非常に強くしっかりとしています。

もう一つのアイアン群は形態的にはこれまでの一本立ち系と同様ですが、花房には多数の花が密につき、個々の花は花梗が短く花は大きいので満開時には見事な円筒形（カラム状）となります。そして何より大きな特長は茎の硬さで、アイアンの名のとおり剛直な茎が際立っています。

この両品種群の性質は、ユーザーである小売商や消費者の立場からすれば利用しきわめて都合がよいため、消費が伸びているわけですが、育種当初には市場側の理解が少ない時期もありました。まずカルテットについては、従来のスタイルとかなり違っていたため、東京の大きな花市場の社長でさえ当初難色を示していました。その後、小売商の間で1～2本を挿しただけでかなり広く埋まると評判となってよく使われるようになり、その社長も率直に前言を訂正していました。またアイアン群についても茎が硬すぎるため、もう少ししなやかさが必要という意見もありましたが、茎の強さと併せて水あげの良さもあり人気徐々に高まり、現在ではその花容の雄大さもあって、前述の市場調査でも‘ホワイトアイアン’が圧倒的な売れゆきを示し、その他の品種も上位を占めています。



カルテットホワイトハーモニー



ホワイトアイアン

4. カルテット、アイアン両群の品種育成のルーツ

これら2群の品種を育成する最初の交配は昭和54年(1979)に浩さんの手で行われました。この交配は、その前に育成されていた赤色分枝系品種‘彼岸王’と白色一本立ち系の品種を交配し、その結果5つのきわめて特長ある系統を得ました。このすべての系統がその後の育種に利用されましたが、なかでも最初1本の茎で伸び上部で分枝する性質と、一本立ちできわめて茎が強い2系統に着目しました。このタイプはともに片親の‘彼岸王’にみられる性質を確実に受けており、浩さんが育成を想定していた現在のカルテット群とアイアン群の性状にマッチするものでした。このうちスプレータイプの性質はストックでは全く存在しなかった形質ですが、その頃に各種切花で導入されていたスプレータイプにヒントを得て浩さんが独自に考えたものでした。

その後このスプレータイプの母本に各色の品種を交配し、いくつかの花色の品種を得て平成5年(1993)にホワイト、チェリー、ピンク、ブルーの4品種を登録し(登録系統名はカル)、以後順次他の花色の品種を育成登録、さらに平成9年(1997)からは幹さんの手により育種活動が続けられています。

また、現在のアイアンタイプについては当初から主として幹さんが交配を行い、平成11年(1999)に6品種を発表したのち、やはり毎年新しい品種を発表しています。

5. その後の幹さんのストック育種業績

前述のように会社設立後、幹さんは他のストックの育種と共に特にカルテットとアイアンの2群について切花利用の幅をさらに広げるため、花色を中心に早晩性やオールダブル系など多くの形質を取り入れています。特に花色についてはこれまでに発現されている単色のほかに花卉の基部と先端部の色が違うストックにはなかった二色花の品種育成を手がけています。また別にストックでは従来存在しなかった黄金色の花色を目指してクリーム色の花色からさらに黄色に近づけるようつとめ、より濃い花色の品種も得られています。

昭和57年(1982)頃から他社で白とクリームの花色の品種について種皮で八重を鑑別できるオールダブルの形質が開発されていますが、KKクロカワにおいても主要品種群について、その形式を取り入れた品種を独自に育成発表しています。

6. さかのぼって‘彼岸王’の育成について

ところでこれら黒川系品種の育成で前述にあるよう母親として利用した‘彼岸王’は昭和45年(1970)に浩さんが従来品種の‘松戸赤’に分枝系早生の‘寒千鳥’を交配して育成したものです。その頃まで‘松戸赤’は安房地域の露地切花生産に利用されていましたが切花品質にはすぐれるものの開花が遅く、春の彼岸に間に合いませんでした。それを彼岸出しに利用できる品種としたものですが、その後、浩さんはさらに同じ形質の‘新彼岸王’を育成し昭和62年(1987)に発表しています。



彼岸王

これらの育成品種は母本の‘松戸赤’とは形質に若干違う点はあるもののよく似ています。草丈は一般の分枝系品種よりやや低いものの茎は硬くしっかりしており、葉も厚くやや強い打込みがあっただけでなく、そして切花後の水あげが抜群に良く、これが切り花の寿命を長くする要因となっています。この茎葉の強さ、水あげの良さを新しい品種に利用することが浩さんの狙いであったわけですが、この目的通りカルテットとアイアン両群の各品種に見事に受け継がれ、前に述べたそれぞれの特長ある形質の形成にも大きく役立っています。ここに育種の成果の偉大さを改めて認識するとともに、すぐれた形質に着目しこれまでになかった品種群の育成をはかった黒川さん父子の天才的な育種感覚に強く感銘されます。

7. ‘松戸赤’のルーツとその後の経過

これまで述べてきた‘松戸赤’の由来については平成13年（2001）4月花葉会発行の『青花への追憶—浅山英一先生を偲ぶ—』のp40～41に筆者が述べてあり、多少重複しますがその他の事項も入れて以下に述べます。

筆者は終戦の翌年昭和21年（1946）5月に現在の千葉大学園芸学部の前身である千葉農業専門学校に入学しました。当時、浅山英一先生はその年の春に復員され花卉研究室の農場復興に努力しておられました。秋には先生はアメリカのボール社からストックの主要品種の種子を購入し、温室の廊下部のベンチで栽培して学生達にストックの品種特性などを説明しておられました。当時同級生の中に大倉明さんという学生がおり、家は東京の世田谷区玉川しのめにあつてお父さんの小田茂さん（姓は違いますが）は東雲園の名で温室経営をしているとのことでした。その大倉さんは学校のストックを見て、参考のためにお父さんから家で栽培しているストックの種子を分けてもらい‘玉川赤’という品種名で浅山先生に提供しました。その品種はそれまで東雲園で長く採種を続け切花生産をされていて市場受けの良い品種とのことでした。先生はその秋に播いて温室内で他の品種と共に栽培されました。

この性状は本稿ですでに述べた‘松戸赤’と同じため省略しますが、打込みがある肉厚の葉や基部で分枝して咲く様子は、浅山先生がボール社から導入した品種中の‘エルクスプライド’（または‘イールクスプライド’）という濃紫色の品種と花色や葉色は違うものの葉や茎の形状がよく似ていました。

その後、筆者は昭和24年（1949）春に卒業し、千葉県職員となって2年後の昭和26年（1951）に当時の県農業試験場安房分場に転勤し、花の試験研究に従事しました。この時期、学生時代にみた‘玉川赤’が‘松戸赤’の名で昭和24年（1949）頃から希望者に種子が販売され、安房地域の花生産者の間にも普及していました。この露地栽培の花は開花は遅いものの市場での評判が良く高く売れる点で好まれており、筆者自身も同分場内の露地栽培で咲いた花を4月に東京市場へ出荷し、意外な高値で取引された記憶があります。

当時、千葉県では南房総地域の園芸開発のための研究を千葉大園芸学部へ委託していましたので、花卉部門では穂坂教授以下、浅山先生やその頃助手であった岩佐吉純さんが現地の栽培者の所に調査でよく来ており、先述の浩さんも調査担当者であったことから圃場を訪れ‘松戸赤’についても話し合っていたと思いま

す。以後の育種の経過はこれまで述べたとおりです。

最初の‘玉川赤’が花卉の温室ではじめてつくられた昭和22年（1947）から数えて今年平成27年（2015）は68年目となりますが、この長い年月の間にも優れた形質は失われず、むしろ立派に花咲き、利用されているわけです。

謝辞 本稿の最初に引用した市場取扱状況のデータは財団法人花普及センターより資料をいただき、また原稿の作成にあたっては黒川浩さんならびに株式会社クロカワストック社長の黒川幹さんにご協力を賜り、添付の写真は株式会社ミヨシより借用いたしました。ここに合せまして厚く御礼申し上げます。